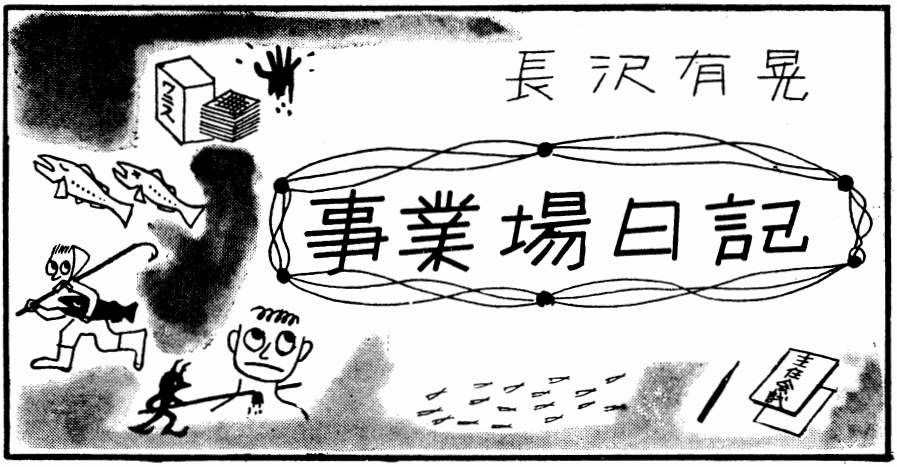

5．捕　獲　場

まだ8月というのに夏は駈足で去り秋が追手の如くにやつてきた。そして，だしぬけにその特色を発揮した。空は冴え人の心も自から澄み，気は静かに，体もまた何となく豊かなるものを覚えるが同時に物足らぬ心地がして淋しさを感ずる

だが，9月に入ると，一斉に鮭漁が始まり，ある者は捕獲に，増殖事業に，商取引に，加工に，またある者は密漁に，そしてその防止に……と浮世の波は鮭をめぐつて騒めき，すべての者がこの魚に傾注するのである。事業場で最も忙しいのはこの頃である。

秋はさやかに更け，悠々の天地に身を置いて，色永遠の大空の下にあつて，変りゆくその美しさを存分に眺めたいと思つても心にうわ濁りを生ずるのは何とした事だろう。雇わるる者は如何なる口実と体裁とを以つても多少の奴隷たるを免かれない。秋の風雅を楽しむ暇など全く無いのは残念である。

秋は更に深まり，落葉松が褐色となり樹木は全く黄葉み，紅葉は真紅に染る頃鮭は次第に熟し溯上の数を増して来た。

今にもぶつ潰れそうな堀立小屋の捕獲場は増々人の出入が激しくなり，夜となく昼となく大勢の人間が集る。狭い小屋の中には孵化場職員および使役人，船頭，漁夫それに払下を受ける業者，それらと取引する商人，魚菜市場の職員，トラックの運転手，密漁取締の警官，漁ありと聞いて頼みもしないのに馳せ参じ手伝をする農夫達，その他雑多な連中が汗とゴム靴と魚の生臭い中で昂奮のうちにとぐろを巻くのである。

直営捕獲場では総て主任が陣頭に立つて指揮を執る。これは当然である。だが捕獲親魚の採卵執刀および人工授精だけは決して他人へはやらせなかつた。思うに，これはどこの事業場主任であつても同じように自己を最も崇高なるものに高める作業なのだと察する。これあるが故に技術者の栄冠？を得ているのである。農林技官の技官たる所以は実にこの一事

にかけているのである。この自己意識が彼の一生を支える重大な誇りとなつている。そして使役人や一般部外者と共に在る時，彼はこの意識を過剰なほどに表わし「農林技官」をたつぷりと披露する。他の者達はこの偉厳と威圧に幻惑され彼の言葉をもつともとしている。批判も判断もない，例え間違い，不合理と知りつつもそれに従うのである。ここに「個人」と「官」との区別があつた。

そして一区切の仕事が落着いた時，主任は一同に茶碗酒を振舞うのだがそれは官庁勤めの官吏と言うより漁場の親方と言つた感じだつた。横目でジロリと酒瓶を睨みながらそれを楽しみにして動き廻つていた彼等は渇いた者の如くに呑み飢えた者の如くに喰つた。男物の下駄くらいに大きい鮭の切身をまだ喰えるぞと言つた顔付でペロリと平らげてしまうのである。

酔うほどに一同は代議士の如く，怒号の如く喋りまくつた。農民は近頃は些も鮭の配給をしてくれないと喚き，警官は待遇の悪さに不平をこぼし，商人は微笑を隠しながらさつぱり儲らぬと宣言し，漁夫達は大漁であつても日給が同額で馬鹿臭いと叫ぶ。それらの言葉は孵化場職員に浴せられた。東海は職員の1人として弁解するために，ソ連抑留時代の浮虜生活を語り，自分こそ損をしている第1人者であるといつた。だが，みんなは何かあるごとに東海より得意気に語られるこの話は大低の者がすでに暗記さえしていたために何の効果もなかつた。主任はさつきの「官」の威風とはまるで違う個人になりきつていた。彼は酒を呑むと毎度のように過去の生活について愚痴を零すのだつた。灰色に燻んだ過去の事業場生活を思い出すのでさえ重苦しそうに，涙ながらに語るのであるが誰一人として慰めを与え同情を寄せる者はいなかつた。

彼は過去30余年の間，毎年数千万尾の稚魚を放流しながら鮭の人工孵化を正面に信じ，それ一筋に生きて来たにもかかわらず年々漁獲は減退し，何のために一生を送つたのか解らなかつた。今まで不便を忍び惨愧に耐えながら事業場生活が全く無益であつたと言うのである。さりとて退職し隠居したいと思つても，土地や家を買う程の金が貯つているのでもなかつた。彼はわが身の老年と共に忍び寄つた言い知れぬ淋しさに細やかな孤立の雰囲気に包まれていた。だが，それは丁度，女が分娩の時のように，そういう時には，他の者は，全く無関係で，たとへ最愛の夫であつても，どうしようもない無意味な役割と化す以外にはないのである。ましてやいかに苦楽を共にした職員であつても，こういう問題は手のつけようもない事である。まさに，自分だけの世界であり，自分だけが負わなければならない苦悩である。結局，独力で，どこかしら実存の遠い一隅で独り，ひつそりと控え目に残りの生涯を送るより手はない。今となつて無闇に威張り散らしたり逆に哀れを装つて同情を乞うても，他人には何の関係もない事なのだ。それでも彼は口説のを止めなかつた。まるで泣上戸ではないかと思われる程に綿々と果しなく語り続けるのだつた。

やがて早い秋の夕暮が，いつの間にか四囲をスツポリと包んでいた。小屋の中

の一同は，主任のそんな泣事などにかまつてはいなかつた。酔にまかせて赤蕪みたいな顔をして勝手な事を喚き散らしていた。彼等の魂は暗赤色を帯て幻影を追う如く，この狭苦しい人息の空間を無茶苦茶に飛び交うのである。外には，大きな満月がゆつくりと昇り始めた。ほとんど身じろぎもせぬ樹木の枝の影と，鏡のように流れる川の幽寂が，魂をとろかせるようだつた。だが，番小屋の中は相変らずの馬鹿騒ぎだつた。そして最後はいつも間違いなくそうなるように下劣なる情に心を労し高潮していつた。東海はいい気になつてソ連の女と日本の女のアレの技術はどちらが上手だつたかをまことしやかに一同に語つていた。みんなは，彼の話に耳を傾けながら，可笑しくてたまらないという風に，大声で笑つていた。

その時である。異様な騒音が唸り，次第に高まつてきた。一同は何事かと騒ぎを止めた。虚空を見上げて，ロシヤ女を想い浮べていた東海の目玉も，その瞬間でピタリと停止した。ただならぬざわめきの音である。

「何だ！　あれは！」と誰かが驚愕に打震え，恐怖さえ含んだ響きをもつて叫んだ。「何の音だ…一体，あれは…」と，東海が狂気のように立上つて窓から外を見た。そして目玉をむいて仰天した。

「ややつ！　鮭の大群だ！」一同はワッと立上つて窓にささり込んだ。

川はゴボゴボと煮えくり返つたように波立つて，魚の背が川幅一杯に犇き合つていた。しかも，それが，50m程も長く続いて，ウライにささり込んでいた。みんな外に出てみたが，この光影には，ただあつけにとられて茫然と眺めているだけだつた。何千尾いるのか見当もつかなかつた。これは一体何という事だ！

主任は川岸に棒立ちになつて，震えるような低い声で呟いていた。

「……生れて始めてだ，始めてだ，こんな事は……始めてだ……」

月光は魚の背に注ぎ，北斗の光は銀鱗に瞬き，川水は繁吹をあげて，幾千万の真珠碧玉を散らしたかの如くに輝いていた。美しや，神の光なり，一同はただ恍惚として，この光影を眺めていた。

ウライは忽ち一杯になり，鮭共は無茶苦茶に暴れ狂つて飛上つていた。私は，あつけにとられて，ぼんやり突立つていた船頭を小突いて言つた。

「ボサーとしてねえでさつさと魚を蓄養池へ移しな。早く！」

みんなは吾に帰つて，その仕事にとりかかつた。しかし，小さな蓄養池は，見る間に一杯となり，直ちに採卵の準備に移つた。蓄養池の鮭は続々とデツキの上に揚げられて一層強く狂気の如く暴れ廻つた。そして，生きた鮭と人間とが入乱れて戦場のような混乱が漲り何とも言えぬ昂奮を覚えた。人々は，手に棍棒を持つて，手当り次第に撲り殺した。殺しても殺しても，魚は次から次から揚げられるので，みんな夢中だつた。警官も警棒を振廻して手伝つた。主任も鮭の頭を撲りながら夢中になつて喚いていた。

「大漁だ，大漁だ，こりや大したもんだ，なんちゆうこつた，大した魚だ……」

主任は猶も呟やきなら昂奮に打震えていた。彼の脳裡には30有余年の間，人知れず苦労してきた思い出の数々が閃めい

た，一体，いつその，報が来るのかと激しい失望に打ち仕枯れた事が何度あつた事だろう。彼には自分の仕事の効果の科学的証明はどうでもよかつた。ただ過去の30余年の苦労と，今のこの奇蹟的大漁だけが結びついた。彼はだしぬけに，発作の如く天を仰いで大声で叫んだ。

「大漁だあー！　俺の魚が帰つて来た，俺の魚が戻つて来たぞーつ！」と手近にあつた鮭を高くさし上げた。魚は主任の手からぬるりと滑り落ちた。彼は再びバタバタと逃げ廻る魚を追いながら，烈しく，必死になつて，大声で呟いた。まるで乞食がばら撒かれた金を拾うように夢中だつた。

「俺のだ，俺の魚だ，それを寄せ！俺の魚が帰つて来たんだ」

一同は再び呆然と突立つて，この情景を眺めていた。

主任は尚も連呼し，次第に湧き上つて来る勝利の気魄に打たれ，憑かれた者の如く，魚を振り廻して絶叫した。彼の周囲には，今，揚げられた鮭が，累々と積み重ねられ，山を築いていた。彼は尚も咽喉を裂いたように絶叫していた。

「俺のだ……俺の魚が帰つて来たんだ」

月光はささやかにこの老主任を照らしていた。

岩手県大槌川に於いて鮭資源維持の試験研究着手

東北大学助教授佐藤隆平氏が河川管理を主体とした鮭鱒資源維持の試験が計画されている。この研究に文部省の試験研究補助金の援助も行われるが，これ等の研究は，北海道としても充分検討して見る必要のあるもので，本場の北海道に先んじて，内地で行われる事ははなはだ情けない話しであるが研究の内容もはなはだ重要なものであるので，その研究の概要を述べると次の通りである。

研究目的：鮭鱒資源を維持するためには，その生活史を通じて，各時期別にこれを適合した管理を行うことが必要である。一方鮭資源は河川生活期において，その80％以上が損耗するといわれており（Neave 1952），この時期の管理がきわめて必要であることが示唆されている。この河川生活期の鮭資源維持の基本は，河川環境を好適な状態に維持することおよびその生存の障害となつている。あらゆる悪条件を駆逐することにあると考えられる。この二つの点を満足させるための対策を実施し，その効果について検討を加えようとするものである。

基礎となる研究成果および現在までの研究状況の概要：米国コロンビヤ河においては，水力用ダムおよび灌漑用水路等の産業開発に平行して，鮭資源の維持に尽大な努力がはらわれている。佐藤氏はこの管理方式を1カ年余にわたつて親しく調査した。また R. Vancleve W. F. Thompson および C. E. Atkinson 等の協力を得て，この管理の効果を検討した結果，数種の鮭資源が減少せずに維持されていることを指摘した。この管理方式の原理は要するに天然環境を好適な状態に維持することにつきると判断される。そこでこの管理方式をわが国に導入して検討し，その効果を詳細に検討しようとするものである。　（大久保）